

プロシーディング (第12回徳島医学会賞受賞論文)

下部直腸癌の術前放射線化学療法による新しい治療戦略

池本哲也¹⁾, 安藤 勤¹⁾, 西岡将規¹⁾, 矢和田裕子³⁾,
寺嶋吉保¹⁾, 生島仁史²⁾, 田代征記⁴⁾, 島田光生¹⁾

¹⁾ 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部器官修復講座臓器病態外科学分野

²⁾ 徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部生体防御腫瘍医学講座病態放射線医学分野

³⁾ 田岡病院外科

⁴⁾ 公立学校共済組合四国中央病院

(平成16年6月1日受付)

(平成16年6月3日受理)

下部直腸進行癌に対しては、肛門縁からの距離および局所リンパ節転移によって根治的切除を目指す目的にししばしば腹会陰直腸切断術が選択され、恒久的人工肛門の造設を余儀なくされる。今回我々は、下部直腸進行癌に対し、術前放射線化学療法を施行し、臨床的かつ病理学的ステージを後退させ、根治的に低位前方切除術を行い得た数例を経験したので、当科における現在までの成績と比較しつつ、文献学的考察を加えて報告する。

目 的

下部進行直腸癌に対して術前放射線化学療法を行うことで down staging および局所の再発制御を行う。

対象および方法

進行直腸癌で腫瘍の下縁が Rb より肛門側にあり、深達度 MP 以上、もしくはリンパ節転移 N1(+)以上の症例で6例で、十分にインフォームトコンセントの得られた患者(表1)。術前放射線化学療法として、2 Gy の体外放射線照射と5-Fluorouracil (5 FU) 300mg/m² の5投2休施行を4週間施行(総線量40Gy, 総5 FU 量6000 mg/m²) した後、全例手術を施行した。

結 果

放射線化学療法を施行したすべての症例で大腸内視鏡上腫瘍の肉眼的形態は縮小し、2例において放射線化学療法前にCT, MRI で指摘されていたリンパ節腫大は上

描出不能であった。他臓器浸潤が疑われた1例において浸潤臓器との境界は明瞭となった。病理学的検索では遠隔転移のある1例を除く例においてD>dであり、治癒切除が得られた。病理学的病期を含め、down staging が全例に対して得られた。1例においては病理学的に癌を認めず、CRであった。

考 察

直腸癌に対する術前放射線化学療法は生存率の向上に関しては十分な有用性は示されていない。しかしながら、局所コントロールは有意差があるとされており、局所再発制御による根治性の向上、腫瘍の縮小による手術適応の拡大等の効果が期待されている。特に、当科における術前放射線化学療法導入後の下部直腸癌症例の恒久的人工肛門造設率は36.3%であり、導入前の66.0%に比し明らかに減少している。すなわち術前放射線化学療法を導入することによって局所がコントロールされれば、超低位前方切除が可能である症例が増加すると考えられる。一方、当科においては局所以外の病巣についても積極的肝切除や肺切除、もしくは動注、全身化学療法で集学的に治療を行っており、さらに生存率向上が期待される。腹腔鏡補助下直腸切除とあわせ、今後、術前放射線化学療法を行い、低位前方切除を行なう当科の方法は根治性と患者のQOLを考慮した下部直腸癌のテーラーメイド治療を可能にするものとして期待される。

Preoperative chemoradiotherapy as a new strategy for lower advanced rectal cancer

Tetsuya Ikemoto¹⁾, Tsutomu Ando¹⁾, Masaki Nishioka¹⁾, Yuko Yawata³⁾, Yoshiyasu Terashima¹⁾, Hitoshi Ikushima²⁾, Seiki Tashiro⁴⁾, and Mitsuo Shimada¹⁾

¹⁾Department of Digestive and Pediatric Surgery, and ²⁾Department of Radiology, Institute of Health Biosciences, The University of Tokushima Graduate School, Tokushima, Japan ; ³⁾Department of Surgery, Taoka Hospital, Tokushima, Japan ; and

⁴⁾Department of Surgery, Shikoku-Chuo Central Hospital, Ehime, Japan

SUMMARY

Purpose : To report cases of advanced rectal cancer that showed significant responses after administration of preoperative chemoradiation therapy.

Methods : 5-Fluorouracil (5-FU, 300mg/m²/day) was administered by 24-hour continuous intravenous infusion after cancers had been decreased in size by radiation (2Gy) administered for 20 days preoperatively. All patients then underwent low anterior resection with lymph node dissection (two cases had super-low anterior resection)

Results : Clinical stages of all patients were down-staged preoperatively. All of operations resulted in a curative resection of the cancer cells macroscopically. In one, histological examination revealed no residual cancer cells in the resected specimen (CR)

Conclusion : Preoperative chemoradiation therapy was demonstrated as a promising regimen for patients with advanced lower rectal cancer, and should be considered to extend indications for even laparoscopic operations for advanced rectal cancer; a therapy tailor made for advanced rectal cancer.

Key words : preoperative chemoradiation, rectal cancer, 5-Fluorouracil

備考：受賞対象となった研究内容は現在，他誌に投稿準備中のため，本誌編集委員会は徳島医学会賞贈与規程第2条「本賞は本会において優れた研究を発表し，かつ受賞後速やかに四国医学雑誌にその研究成果を原著，総説，プロシーディング等論文として発表する本会会員に授与する」にのっとりプロシーディングとして受理しました。